

# 車いすバドミントン初心者に対する導入プログラムの検討

牛木 鮎子 ( 筑波大学 )

## 1. 目的

車いすバドミントンは、2020年東京パラリンピック競技大会から正式種目に認定され、メディアの注目を浴びるようになってきたが、特化した研究や、導入のためのプログラムはほとんどない。このことは車いす利用者が始めるスポーツの選択肢の限定や継続の妨げになり得る。したがって、本研究は車いすバドミントン初心者に対する導入プログラムに必要な要素を明らかにし、それらをもとに導入プログラム構築のための基礎資料を作ることを目的とした。

## 2. 研究方法

対象は、成人の車いすバドミントン経験者5人でいずれも中途障がい者である。車いすバドミントンの経験年数は約1年から約17年である(表)。

表. 対象者

対象者	性別	経験年数	障がいの種類	発症時期	クラス	強化指定
A	男	5年	慢性炎症性脱髄性多発性神経炎	約10年前	WH1	あり 強化指定A
B	女	15年	脊髄損傷(L1)	中途 15年前	WH1	あり 強化指定 次世代アスリート
C	男	3年	糖尿病による 両膝下切断	中途 5年前	非該当	なし
D	男	1年	脳性麻痺(後遺症)	中途 42年前	未確定	なし
E	男	17年	脊髄損傷による 両下肢機能全廃 (T11 完全麻痺)	中途 18年前	WH1	あり 強化指定S

調査は2018年10月、半構造化インタビューで実施した。インタビュー項目の軸は以下の4つである。

- (1) 車いすバドミントンを始めたきっかけ
- (2) 車いすバドミントンの継続理由・魅力
- (3) 車いすバドミントンに対する印象
- (4) 車いすバドミントンの普及

KJ法をもとに質的分析を行った。まず、対象者の同意のもとにインタビュー内容を録音した後、逐語化した。次にインタビュー内容を意味のあるまとまりごとに1つのデータとし、内容の類似するもので項目を作成、項目同士の関連性をもとに大項目を設定してカテゴリ化した。

## 3. 結果と考察

きっかけ作りには、興味や障がいの進行に伴う種

目変更等のカテゴリーが該当し、受傷前のバドミントン経験に加えて、他者からのすすめ(医療機関、特にPTによる情報提供)、テレビや新聞のニュース報道、特集などによる広報、車いすを実際に操作する体験会等が重要であると考えられた。

継続要因には車いすバドミントンならではのプレーや向上心、費用対効果や生きる手段、車いすバドミントンを始める前後のギャップ等のカテゴリーが該当し、専門の用具や施設を整備するとともに、難易度を考慮して楽しさを感じられるようなチェアワークとヒッティングの技術練習、仲間作りを意識したプログラムの作成が必要であり、初心者自身が車いすバドミントンを楽しいと思っていることも重要であると考えられた。

そして競技人口拡大や認知度向上など車いすバドミントンの普及には、自身が行う活動、環境等のカテゴリーが該当し、広報活動や体験会等を通じた全国民対象の情報発信、健常者と車いす利用者が同じ場にいる練習会場や大会、アクセスを考慮した場の設定、志向性の違いを考慮し目的に応じた導入、指導者確立のための資格制度の整備、指導者の指標が必要であると考えられた。

## 4. 結論

本研究から、車いす利用者が車いすバドミントンを始めるきっかけ、継続、普及に必要な各要素が明らかとなり、それらに基づく導入プログラムを検討することができた。しかし、考案したプログラムは車いす利用者を想定しバドミントンの指導法や初心者の特徴をアダプテッドしたものであることから、今後車いすバドミントン初心者を対象に有効性を検証し導入プログラムを完成させることが必要である。

## 5. 主な参考文献

- 1) 笹川スポーツ財団(2018):「地域における障害者スポーツ普及促進事業(障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究)」報告書。